

218
252

曹洞宗々要講話

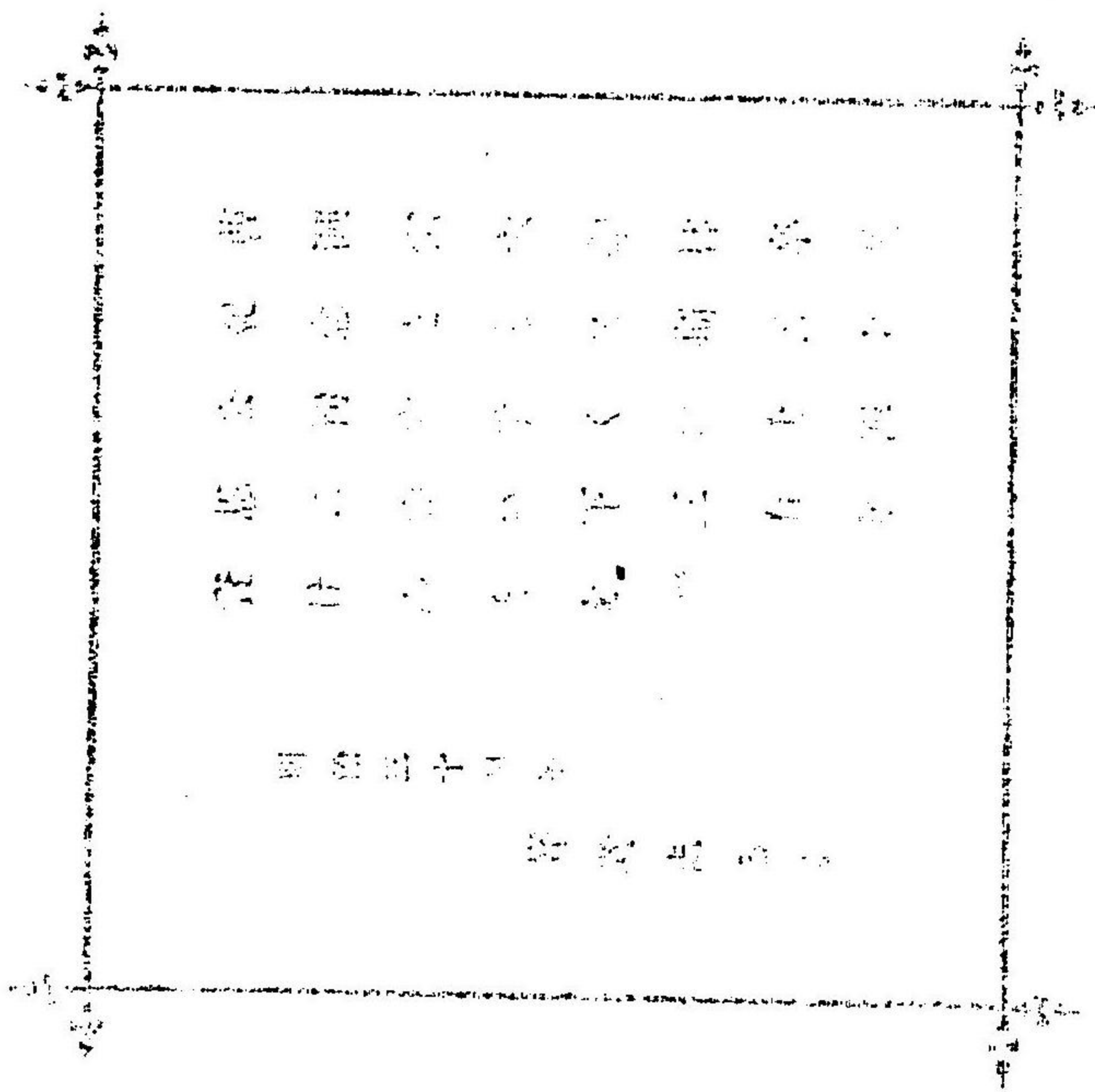
東京 草溪社發行

L-65

曹洞宗大學林卒業
紀念として斯書を
公刊す冀くは上四
恩に報い下三有と
資けんとを

明治三十四年

著者志るす



林學大宗洞曹窪下日北布麻京東

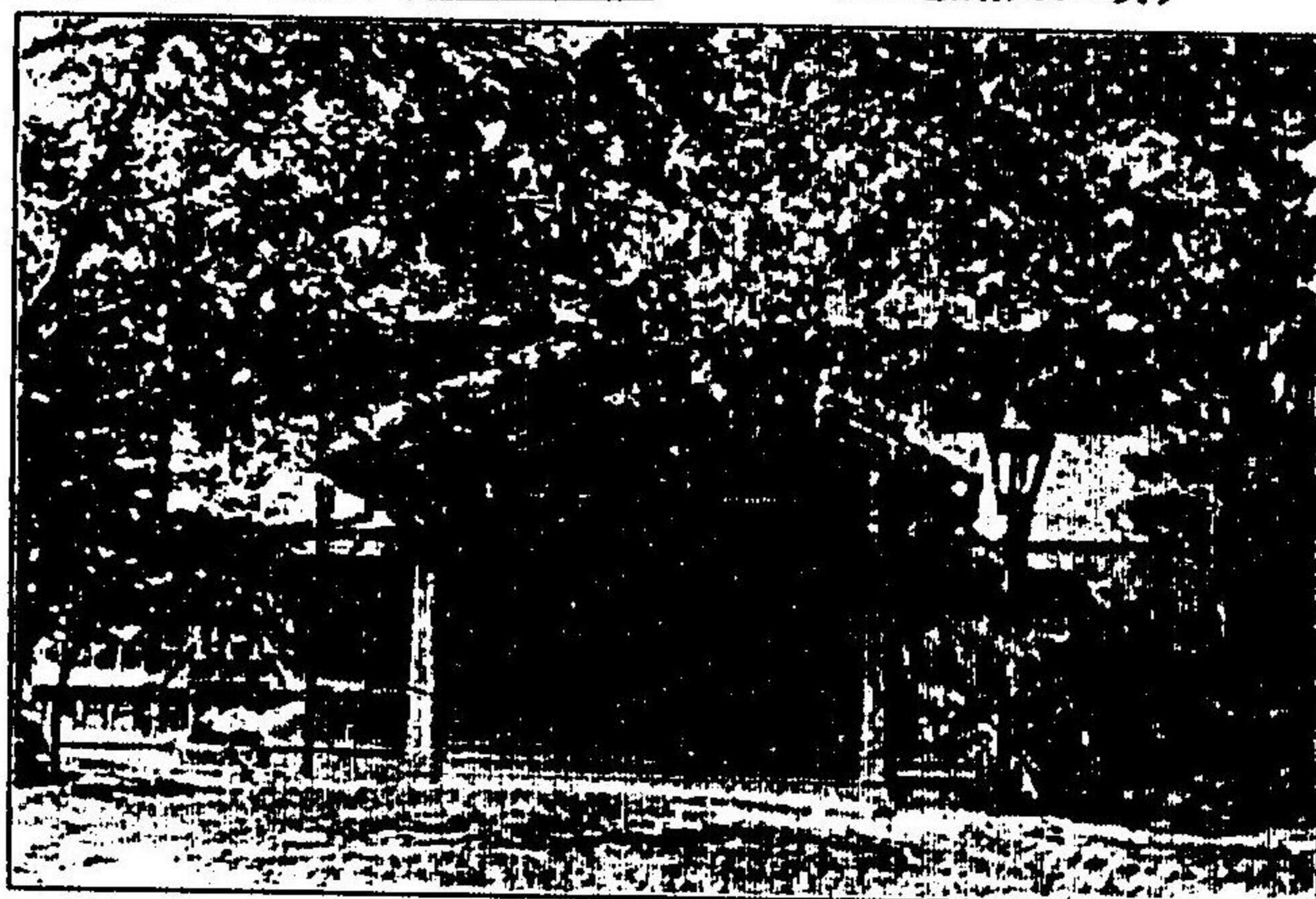
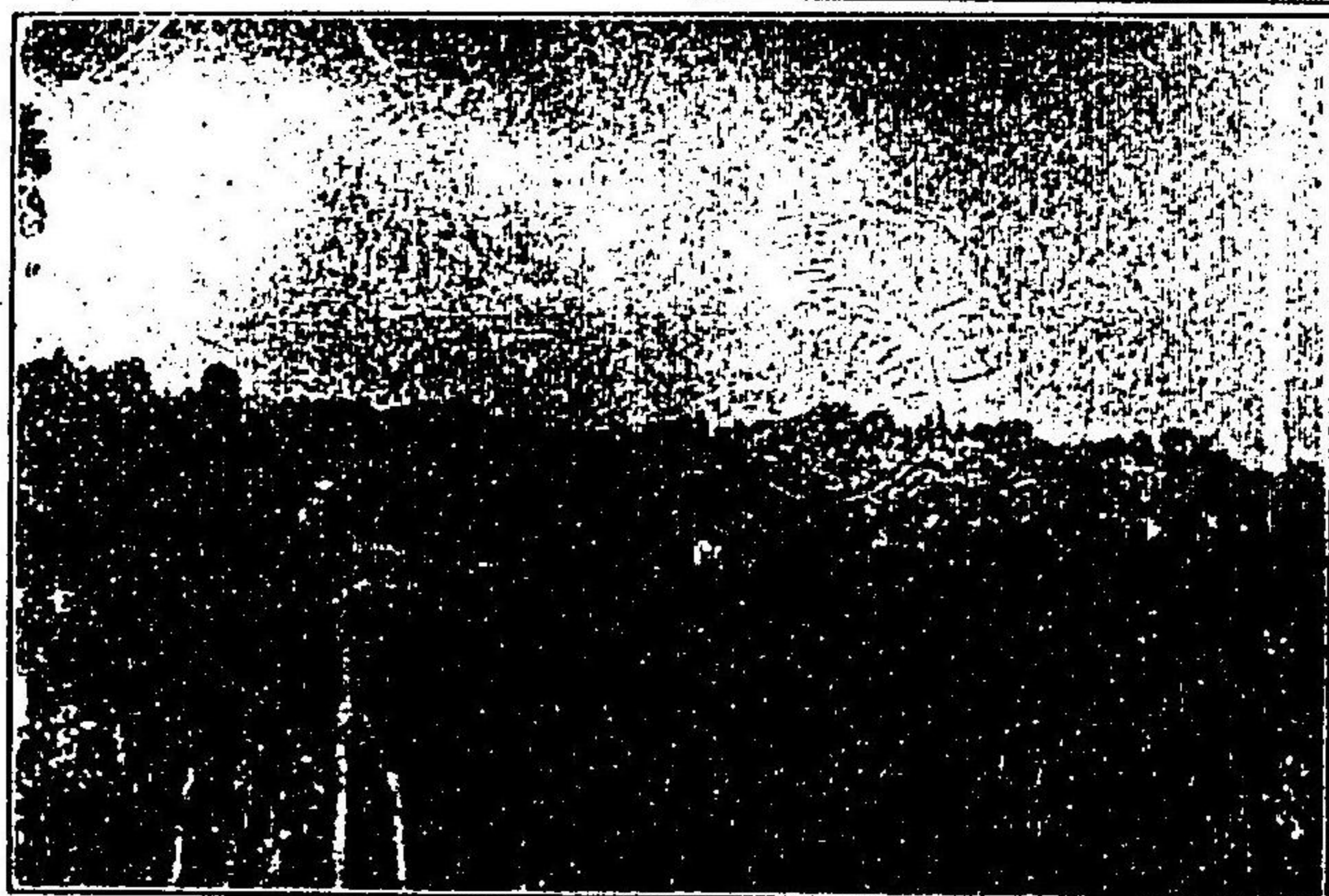
特48
553



(其一)正門

(其三)大學林背
 後の山上より
 三田の丘陵を
 距て、品海を
 望む

面正堂講大(二其)



性海慈船禪師垂示

侍者 某甲筆記

今の若い人等は、山僧等の若い時と違つて、皆學林へ出て勉強するから、學問だけは大分出來る者がある、又叢林などへ入て修行する人も、決して少なくはない様ぢやがドウも斯云ふ人等は、學林や叢林に居る中だけ、可成、物も出來、人の爲にもなりさうに見ゆるけれども、一旦叢林を出たり、學林を卒業して郷へ歸り、寺院の住職にでもなると、平々凡々の人等と同じ様になつて了ふ者が多い様ぢや、ナルホド、書籍を讀ませれば、讀みもする、談話をさせれば、せんでもないが、肝心の、「人の爲になる」と云ふとがな、誠に惜しいとであるが、畢竟、之は、學林や、叢林に居る時の精神を、卒業と同時に失して了ふからの事ぢや、殊て承知の通り、佛教の目的とする所、又宗教家の本分とする所は、自分の安心を固め、世間の人を導き、國民の精神を引立てるのが、第一番の務めぢや、それを宗教家が、若し忘つて、世間の人心を引立て、行かぬ時には、政府の役員等は、宗教は國家に必要がないと思ふ様になつて、實に遺憾の至りぢや、併し、今まで世に立つて居た寺院の住職等は、大抵山僧と同じく、追々老人の仲間に入り、後の引請人は、皆若い人等に頼まねばならぬのぢや、尤も物事は凡て無常のものぢやから、サウ、順通りに往くものでもないが、先づ老人は先へ逝き、若い人が後を襲ぐのが一般の順序ぢやに由つて、其責任も、中々大したものぢや、特に、是から社會の物事も愈々複雑になり、宗教家の爲さなければならぬ事業も愈々増加する有様ぢやから、萬事に

付けて注意を怠らず、出来るだけの盡力をして、宗門の爲に、國家の爲になるやうにして呉れなければならぬ、又何方も、何時何時、何處から住職をして呉れと招待されるかも知れず、又本師が病氣其他で、是非後住に出なければならぬやうにならぬとも限らんが、若し左様な場合になると、イクラ學問がしたい、書籍が見たいと云ふ志を起しても、種々な妨害が出来て、容易に思ふ通り往くものではない、マヤに由て、何でも、身体が自由が利く時に、熱々氣を付けて、決して無益に時間を費さぬ様にし、精々骨折つて後に残念なとをしたと悔むとのない様に、充分勉強して貰ひたい、併し、唯、無暗に學問ばかりした處で、人の爲にならぬ程なら、何の所詮もないとぢやから、何でも人の爲になる様に意を注げ、天下の人心を引立て、國家の爲になるとを考へ、又時機を見計らつて、法孫を育てるとを心掛けて萬事缺點のないやうに通つて貰ひたいものぢや、今の若い人等が、國家の爲に盡し社會の爲に盡して呉れば、其が直に宗門の爲にもなり、佛敎の爲にも又宗敎の面目を維持する爲にもなることぢやから、何分、自分を忘れぬ様に頼む、謂ひたいとも、澤山あるが、暑い時ぢやから、マア是で措く、お互に法身堅固に勉強せられるやうに。

卒業生ヲ送ル詞

曹洞宗大學林總監 陸 鉞 巖

本日ハ曹洞宗大學林生徒某氏已下五拾名、大學林ヲ卒業セラレ、ノ吉辰ニ遣ヘリ、予豈ニ一片ノ送詞ナカルヘケンヤ、蓋シ大學林ハ宗門ニ於ケル最高等ノ學林ナリ、此學林ヲ卒業セントスルニハ先ツ入林スルニ恰當ナル學業ノ素地ナカルベカラズ、而シテ其入林セシ上ニ於テモ、更ニ幾多ノ年月ト、幾多ノ學費ト、幾多ノ堪忍苦心ト、身軀ノ健全ト、他ニ辨道修學ノ障礙ト成ルベキ事情ナキノ幸運ト相併備スルニアラズンバ克ク其幾了ル丁能ハズ、是レ其大學林創設已來入林生ノ夥多ニシテ、而カモ卒業生ノ甚ダ多カラザル所以ナリ、然ルニ今諸氏ハ幸ニ其業ヲ卒ヘ本日ヲ以テ名譽アル卒業證書ヲ領得スルノ榮ニ遣値セラル、是レ單ニ諸氏ノ爲ニ賀スベキノミニアラズ實ニ宗門ノ爲ニ賀スベキナリ、是ニ於テ予ハ諸氏ノ爲ニ賀詞ヲ陳アルト同時ニ、更ニ將來ニ望ミ屬スル所ノモノヲ陳セント欲ス、

抑モ僧侶ノ職責トハ何ゾ、蓋シ一ニシテ足ラザルモ、要チ操テ之ヲ云ハバ、教學ニ途ノ進歩發達ヲ圖ルト云フニ過ギザルベシ、謂ユル衆生ヲ接濟スルト宗門ノ興隆ヲ期スルト云フモノ是ナリ、撥草瞻風參禪辨道ヲ爲スハ何ノ爲ゾ、已上ノ目的ヲ達センカ爲ナリ、積年苦學ハ何ノ爲ソ亦已上ノ目的ヲ達センカ爲ノミ、古來各宗ノ高僧碩德ノ芳跡モ、亦蓋シ之ニ過ギズ、果シテ然ラバ身僧侶タルモノ、常ニ衆生ノ爲メ宗門ノ爲メニ粉骨碎身ヲモ辭セザル素志ナカルヘカラズ、矧ヤ今日ノ如キ宗門ノ教育等猶未タ充分ニ進マス教團荒涼ニ屬セル秋ニ於テチヤ、元來教學ノ二途中其前後ヲ云ハ、教育先ツ學リテ而シテ後ニ布教其果ヲ觀ルベキモ、其緩急ヲ云ハ、布教ハ急事ノ急ニ屬ス、殊ニ今日ノ如キハ最モ然リトス、何トナレバ今ヤ我宗ノ教田タル、予カ卑見ヲ以テ之ヲ視レバ、十中ノ七八餘ニ荒蕪ニ屬シ、中ニハ不毛ノ地トモ云フベキ所夥カリズ、其餘ノ三部ハ僅ニ開拓耕耘ノ地ニ屬スルモ、如何セン、適當ノ肥料ヲ施スフ少クシテ、却ツテ其果實ノ未タ熟セザルニ、類ニ之ヲ刈穫スルニ似タル風アルバ、表面ヤ、開拓耕耘ノ樂觀アルモ内部ハ地脊ヲ萎衰ヘ、悲ムヘキ情況ニ屬スト謂フベシ、此邊ノ事、彼此大觀シ來レバ、目下宗門ノ事業トシ

テ布教ノ如キハ、殊ニ焦眉ノ急中ノ急ニ屬シ居ル事ニアラズヤ、然リ而シテ其布教手段ノ如キモ、今日已後ニ於テハ從前ノ如ク單ニ内地ノ布教ノミニ止マラズ、海外ニ向ツテモ教線ヲ張ルヘキ必要アリ、同一内地ノ布教ニ於テモ、宗門ノ種子タル寺院檀信ノ絶無若クハ極メテ僅少ナル中開ノ地ニ布教スルハ宗門ニ竭ス所ノ功偉ナルモノト云フベキナリ、且ツ其方法トシテハ、公共事業ナリ、慈善事業ナリ、有形上ニ現ハレシ實際的ノ事業ヲ企圖スヘキハ亦今日ノ急務ニ屬ス、今假ニ項目ヲ列記セバ太要左ノ如キ結果ヲ得ン乎、

●内地布教ノ部

△冲繩縣布教△臺灣布教△北海道布教△小笠原島、八丈島、佐渡等布教△鹿兒島縣ノ如キ曹洞宗寺院檀信ノ少ナキ地ノ布教△四國之ニ同シ
△其他内地ノ各縣下ニ之ニ同シキ郡、市又ハ港灣等ノ布教△監獄布教ノ必要△軍隊布教ノ必要△(甲)陸軍布教△(乙)海軍布教△無宗教心ノ官吏及學生等ヘノ布教△礦山布教ノ必要△職工、労働人、工女輩ヘノ布教△一般ノ婦人布教ノ必要(此外今之ヲ略ス)

●海外布教ノ部

△浦羅斯德ヘ布教△朝鮮沿岸ノ要地又ハ内地ヘノ布教△支那沿岸ノ要地又ハ内地ヘノ布教△香港、柴良、新嘉坡、ヒリナンノ如キ地ヘノ布教△錫蘭、孟買、甲谷地等ヘノ布教

(歐米ノ布教ハ云フヘリシテ行ハレ難キモノトスルモ已上東洋各地ノ布教ノ如キハ之ヲ爲サント欲セハ或ハ爲スヲ難キモノニモアラザルベシ)

已上ノ諸項ノ如キ、之ヲ宗門の事業トシテ述ニ爲ササルヘカラサルハ、予カ辯ヲ候ササル所、而カモ今日ニ於テ未ダ是等ノ施設全カラザルハ直ニ是レ佛教ノ實際上ニ於テ耶蘇教等ニ一籌ヲ輸スル所以ナルモ如何セン宗門ノ財政之ヲ許ササルト時機未ダ到達セザルトニ基因ス、豈ニ痛歎ニ勝ヘサランヤ、今諸氏ハ多年宗門最高ノ學林ニ在ツテ最高ノ教育ヲ受ケ、本日、名譽アル卒業證書ヲ受領スルノ榮ニ遭遇セフル、希クハ將來ニ小成ニ安ンセス、宗門ノ木鐸ト爲リ、重鎮ト爲リ、指南車ト爲リ、時トシテハ輿論ノ喚起者トモ爲リテ、上來列記ノ如キ事業ニモ及テ限リハ之ニ盡シシ多年學得セシ學理ヲ實地ニ應用シ、以テ教學ノ二大重任ヲ双肩ニ擔ヒ、邦家ノ爲メ宗門ノ爲ニ力ヲ竭サレンコトヲ、茲ニ卒業式ニ浴ミ、賀詞ヲ陳アルト同時ニ將來ニ望ム所ヲ告白スルコト斯ノ如シト云爾

明治三十四年七月八日

曹洞宗々々要講話

- (一)佛敎は等閑に解すべきものに非ず(二)祖斷野の(三)佛敎の他敎に勝れたる所以(四)禪宗の起原(五)日本曹洞宗の起原(六)曹洞宗の修行に出家門在家門の二途あると(七)曹洞教會修證義大要(八)結言

近頃佛敎のとを知りたいと云ふ人か大分世間に出來て來て、彼方でも此方でも佛敎の話をすると云ふとになつて、誠に結構などであるが、就ては、長々しい研究をして居るとは出來んに依つて、何卒手軽に佛法の講釋が聞きたい、講釋を聞くより、もつと簡単に佛法の大意を一口で解る法はあるまいかと云うて、時々御問ひになるお方がある、それも佛法のとはかりではない、禪學が流行ると云へば、直に「禪學大意」とか、「禪學早わかり」とか云ふ書籍ぐらゐを買つて僅か三分か五分の間に禪學の大意を知つて了はうと云ふ人が大分出來たやうである、私共も、時々左様云ふ人等に攻め掛けられて、餘程困つたことがある、まゐ、よく考へて見ると、佛法とは、佛様の開かれた教へであつて、今から二千年餘り前に、釋迦牟尼佛が九重の御位を打捨て、久しい間難行苦行を御容めなされ、豁然大悟をして、世の中の眞實の道理に限なく明らかになつた上で、更に四十餘年の説法をせられたものが、即ち佛敎の起原であつて、更に歴代の祖師方か、種々と苦心せられて、始めて、今日に傳はつたものであれば、中々容易などでは、佛法は説き明しの出來るものでは

ない、誰様も御存知のとであらう、達磨大師が印度から、支那へ渡られて、禪宗を擴めやうとせられた時に、一番初めに梁の武帝と云ふ支那の天子に面會せられて、問答があつたが、一向にどうも貴い佛法を會得するところが出来なないので、最早これでは仕方がない、香く山に入つて、眞實の修行者か出来るのを待つより外はないと、覺悟を定めて、少林山と云ふ山の庵室に入れ、一人坐禪をして居られた時に、慧可大師と云ふ方が何卒御弟子になりたいと云うて、態々登つて來られたけれども、達磨大師は、一向に、其様とを御尋ねなされず、見向きもせず、やはり坐禪をして居られた、乃で、慧可大師も、これは、必ず、我が志の程を試されるところであらうと考へたものか、少しも撓まず、雪の中に立つて、チツと待つて居られたが、達磨大師も之を見て、少しは感心せられたものであるか、「汝久しく雪中に立つ、當に何事をか求む」と、雪の中に立つて居るのは何故であるぞと問ひ掛けられた、慧可大師は大に喜んで、唯願はくは和尙慈悲心を以て群品を度し玉はんことを、偏に御願ひ申されたが、達磨大師は、其時に、佛祖の大道は小徳小智輕心慢心で、等閑な心掛けを以て求むるとは出来ぬぞ、身を抛ち、心を籠めて修行をしなければ、兎ても佛法の修行は出来るものでないぞと、懇ろに教へられたので、慧可大師は、こそ一番我が志の堅きことを明にせねばならぬ處ぢやと覺悟をして、有合ふ刀を揮つて、自分の左の臂を斷り、血の滴たる腕を達磨大師の前へ出された、別段、腕を何様しやうの、斯様しやうのと云ふ譯ではない、如何なる難行苦行も佛法の爲とあれば苦勞とは思ひませず、充分に願ひますと云ふことを現はさうとて、なされたことである、達磨大師は、熱々御覽な

れて、あゝ實に感心なものぢや、佛様も最初道を求めらるゝ時には、法の爲に身形を忘れて苦行せられたが、今、仁者も我が面前に於て臂を斷ち、誓くまで修行しやうと云ふ志を示されたは誠に感心の外はない、よし、及ばずながら弟子として教導して遣はさうと云はれ、夫れから慧可大師は八年間達磨大師の御側に付き随つて居られて、遂に支那の禪宗の第二祖となられたのである、古の人は佛教を聞き、禪宗の教を知りたいばかりに、雪の中に一夜立ち盡して、まだ足らず、親から貰うた大切の臂を一本切り落してまでも修行の志の堅いとを示したと云ふ位で、世間の人でも「二祖斷臂」と云へば、實に貴い事として賞讃して居るとであるが、斯る苦勞までして始めて傳へられた佛法を、此頃の人々が、新聞紙でも讀んだり、小説でも見たりするやうなことに考へて、下宿屋の二階で、ソツクを枕にして、禪學の奧義を知らうなどと思はれぬのは、甚だ以て不心得の話である、さう安々と解るものなら、達磨大師は、態々印度から三年の航路を経て支那まで來られるしない、また、其本元の釋迦牟尼佛とても、四十餘年も、何て説法せられませう、佛教は聞きたいが、面側臭いとは厭だ、何ぞ樂に佛教の解る法はあるまいかと云ふやうなことを云うて居られる人等には、私共も、大に叱言を差上げたい位である、

雖然、斯様は申すもの、此れは諸君に佛教を輕々しく見てはならぬと云ふ御注意を與へたまで、唯た佛教を、貴いものである、容易に解らぬものであるとばかり云うて居つたのでは、一向に佛法を弘通する譯には參りませぬから、極、簡單に、佛教の大意、禪學の大意と云ふやうなことを話して行かうと思ひます、

今日、世界の宗教の数を調べて見ると、種々様々分れて居るが、まづ、西洋の方の大宗教は耶蘇教で、東洋の方は、佛教である、其に支那には儒教と云ふものがあり、亞細亞の西の方には回教があつて、それ／＼教法を擴めて居るけれども、其中で、最も隆盛で、また尤も高尚の宗教と云うたら、まづ佛教である、種々の宗教を調べて見れば、その中には、中々高尚な教もあり、又、完全な處もあるが、佛教の開かれた最初の動機は、神様であるとか、神の子であるとか云ふ不思議なことから初まつたのではない、我が佛教の開祖たる釋迦牟尼佛が、明かな智識を以て、我等一切衆生を濟度しやうと云ふ慈悲の御考へから初めて設法せられたもので、其の釋迦牟尼佛の出家せられた原因を探つて見れば、此の世の中の有様が實に頼み難く、今日ありて最早翌日を定められず、昨日の淵は今日の瀬となると云ふ世間の有様、我々人間は、其中に生れて來ても、何の意味も解らず、何が此世の因とも知らず、唯だ生れて來たから生きて居る、死ぬ事になるから死ぬのであると云ふやうな、實に人間の皮を被つて生れて來た甲斐もない淺ましい生活をして、罪が歸らぬ生命を持つて居るとは、實に情ないものである、抑々此の世の中は、何様云ふものであらうか、又、人間と生れて來て、此世に五十年なり、八十年なりの生命を持つて居るには、何様すれば可いであらうか、生れるのを樂み、死ぬのを悲んで、何のとも解らず、憂喜苦樂の情欲を動搖して居るのは、何様したら取除くことが出來やうかと、種々と考へられた末に、遂に身は印度迦毘羅城の天子の御子様たる貴い御身分に拘らず、淨飯大王と云ふ御父上、耶輸陀羅女と云ふ御后をも打捨て、或時は山中に苦行をなされ、或時は川の邊に佇み玉ひ、或時は菩提樹下に坐禪し玉うて、段々と御工夫あつて、遂に悟りを開かれたのが、即ち、世間で申す、「一見明星」の成道の時で、成程天地間の道理は斯様であつたなと悟らせられた、其の悟りの其儘が直に四十餘年の説法となつて、佛教と云ふ大きな御宗旨は組立てられ、其御説法を筆記したものが五千餘卷の一切藏經と申して、澤山な御經となつて居る、今日に佛法が傳はつて參つたのも、ツツツ、其等の御經の遺つて居つた爲に、誠に明かな證據となつて、佛法弘通の上にも少からぬ利益がある云ふものであるが、斯の如く、佛様の御修行は、偏に御自身の智識から御發明なされたものであつて、世間にある卑しい宗教のやうに妖怪のやうな者から法を傳はつたの、何やら神様からの御託宣に依つて開いたの云ふ教ぢやのど云ふやうな怪しい處は、少しもない、誠に其教は、鮮麗であつて、誰に聞かしても、誰に説いても、少しも差障りのない教である、今日の學者などが、随分宗教のとなを評論して、宗教は迷信である、宗教は下流社會の人の信すべきもので、兎ても開明の世界に用ひらるべきものではないなど、非難をして、佛教の悪口を云ふ人もありますが、其の悪口を云ふ人等でも、佛様のとは、全く悪口を云ふ者はない、佛教の今日の有様は何様であるとか、將來は何様であるとか、種々と議論をする者もあるわけではあるが、佛様が、悪い人であるとか、恐い人であるとか云ふとは、決して申す者が無い、佛は大聖人である、佛は、其の道理に於ては、實に世界に比ぶものもない程の高尚な教であると、口々に贊めて居る、今まで、東洋のとは何も彼

も悪く云うて居た西洋人でも、此頃では、大に眼を醒まして、佛教の研究をなし、此間亡なられた英國の
 マクスミユラーと云ふ學者の如きは、三萬何千圓と云ふ大金の書籍を保存して居られたが、其の大金の書籍
 の中には、佛教に關するものが頗る多く、且つ其の一生涯の中に、佛教の爲に、種々の研究をなされたことが
 多數あつたと云ふとは、誰方も御存知のとであらう、其他西洋の學者が佛教に關する研究をなし、種々の書
 籍を著はされて、佛教の諸宗教に勝れて居るとを論じて居るとは、近頃に至つて、一層其度を高め、今日で
 は、佛教は東洋の宗教では無い、世界何處にも遍滿つて居る宗教であると云ふやうになつたとは、已に何人
 も異存のない處である、即ち佛教と云ふ宗教は、怪しいとや、不思議などのない、極めて透明つた、暗い處
 のない宗教である、其故或る學者等は、佛教と耶蘇教とを比較べて、佛教は智の宗教である、耶蘇教は情の
 宗教であると云ふた、智の宗教とは、眞實我々の心を研いて、到り得る處の教であつて、吾人が自己の心を
 研き、其の眞實の本質を現はす時には、其時直に佛と同じ位に上るとが出来ると云ふ教で、何も別段怪しい
 神の託や、本籍の解らない神様とか、天理王とか云ふものを尊敬して、其物の奴僕とならねばならぬと云ふ
 やうな愚な宗教ではないのである、然るに、耶蘇教は、人間の情欲と云ふものを基として居るから、理屈は
 解らんでも唯だ人情の上から立てた宗教で、智慧の方のとを論ずるとは、甚だ疎いものであるとは、西洋
 の學者が云うて居ることであるが、其様な比較は何様でも可いとしたところで、兎も角も、佛教は、智慧と
 根本として立つた宗教、其の宗教の開祖たる釋迦牟尼佛は、御自分の智慧を研いて悟りを開かれ、其の悟り

のまゝを慈悲心の餘りに我々にお示しなされたのが、即ち佛教であるとして見れば、佛教は、智慧と、慈悲
 との二つの勢力が原因になつて、始めて出来た宗教で、智慧二門と云ふ語が、佛教の中に數知れぬ程見えま
 すのは、實に之が爲めであります智慧と云ふ本體の上に、慈悲と云ふ衣を着せて、さて、それが衆生濟度と
 活用して來るのであるから、實に佛教には、美事に體、相、用の三つを備へ、又、智、情、意の三つを備へ、
 申し分のなき宗教として、信仰すべきものであらうと思ふ、

さて、此る宗教であるから、佛教を學ばんとせらるゝ方には、決して、最初から、神様を崇めの、御釋
 迦様を崇み 上れのと教へない、佛様の御説法の通りに、まづ、我身の上から、世間の有様までも考へて
 見て、誠に此世が無常であると云ふとが解つたら、其處で、此世の頼み難いと云ふ心と起せ、之が菩提心と
 云ふて、佛道に入る最初の門戸である、我が龍樹祖師の御語には「世間生滅の無常を觀する心も亦菩提心と
 名く」とあつて、此身、此世の頼み難いとが解り、又此世の汚れて居るとが解つて來れば、自然と、此身が
 安らかになるやうに、心の安まるやうにしたいと云ふ希望が起つて來る、其時に即ち佛道に入る心が起つて
 來るのであると、斯様な鹽梅で、佛教では、初めから無理に押付けはしない、まづ人々の心に問うて見て、
 其の心に問うた曉に、まことに之ではならぬ、尊い道が承りたいと思つた處で、佛教の味が解つて來る、
 其時始めて佛法の貴いとも知れるのである、と、斯様に順序を踏んで佛教の門に入らしめるので、無理など
 は、全く説かれてないのである、我々は此の一つの點だけを見ても實に佛教の大なる教であつて、且つ道理

を宗とし、智慧を本とした完全な宗教であると云ふとを信する者である。

三

さて斯様に、佛教は尊い宗教であります、道理の高い宗教であります、斯様に高いとは高いが、唯だ高い
く云ふばかりでは、一向に衆生を濟度するとか出来ぬ、乃で其の濟度をする爲には、自然、また種々と
教への仕方があつて、釋迦牟尼佛御在世の時にも、それく、男には男のやう、女には女のやう、智慧のあ
る者にはそれに適ふやう、愚鈍の者には愚鈍の者のやうに、段々御説きになつた、それが時を経るに従つて、
佛様の説かれたる語の中の彼方此方を各々取り出して、各自の説を立て、遂に佛教の中に數多の宗派が出来
るやうになつて來た、其の宗旨の數は、中々澤山あります、印度に於ては小乘二十部と云ふて、小乘と云ふ
中にも二十部の別れがあつたと云ひ、それから、種々と物遷り星變つて、支那に於ても、各々宗派を分ち、
日本に參つてから暫時の間は宗派はなく、南都朝の時には、南都六宗と云ふ語があつて、奈良には六つの宗
旨があつた、其の後に、天台、眞言等の宗旨が來て、遂に入宗となり、また淨土宗、禪宗、淨土眞宗、日蓮
宗、時宗などが出來て來て、或は十二宗と云ひ、十三宗と云ひ、今日では、まづ十八宗、四十一派もあると
になつて來た、誠に御宗旨の數は、大層なもので、何らが何様とも見分けの就かぬ程である、唯だ一人の釋
迦牟尼佛の御説法が斯くも數多に分れるとは、不思議なやうにも思はるゝが、人々の好む所に從ひ、一人た
りとも多く濟度しやうと云ふ祖師方の御志から、段々と其門戸を別にして參つて、此の通りの有様となつ

たのであるから、宗派の多ければ多いほど、佛教が何處へでも適當する宗教であると云ふことが解るのであ
る、て、其の別け方にも、種々あつて、まづ、一番手短かに別ければ、釋迦牟尼佛の教へに從ひ、智慧を研
いて佛にならうと云ふ御宗旨と、又、阿彌陀佛を御頼み申して、其のお方に頼りて極樂淨土へ往生させて戴
かうと云ふ宗旨と、それから、又大日如來を尊崇して、自ら大日如來の位に上らうと云ふ宗旨との三つに分
れるのであるが、是には聖道門、淨土門等の名の立て方もあつて、今は茲では精しくは辨ぜられぬが、仲々
面倒などである、けれども、是等の宗旨の本を洗つて見れば、ツマリ佛様の教に從ひ、自己の迷ひの心を打
捨て、眞實の道理を悟り、佛の位に上りて、安樂の境界に至らせたいと云ふ望の外に何事もないのであれ
ば、門戸こそ違へ、眞實の目的に至れば、何の差違もないのである、古い歌にも「わけ登る麓の道は多けれ
ど同じ高嶺の月を見るかな」とある、眞實の道理に達するには、決して彼方此方の區別はない、孰れも共に
佛の位に上るとであるから、何れも宗旨同士で相争ふとは要らぬ、併し、私共は、何宗も同じとである、何宗
でも甲乙がないと云ふのではない、各宗には宗義の説き方に甲乙がないではないから、互に學問上やら、又
信仰上から相共に研究をするのは、悪いとではないのである、さりながら、其の研究の度を過ぎて、唯だ妄
に相争ふのを本職とするに至つては、まだ大に戒めねばならぬとてわらうと思ふ。

四

然らば、今、其の多い宗派の中の禪宗と云ふ宗旨は何様なとを説くものであるか、何様云ふ教であるかと云

ふと、何様も禪宗のお話をすると、通常手前味噌で、身最負をするやうに聞えるから、少々説き難いとはあるが、兎も角も、禪宗のとを一握みに摘んで云うて見れば、全肺、禪宗と云ふと、何か一つの御宗旨の中に入つて居るやうに聞えるが、實は禪宗と云ふのは、あまり私共の氣に入らぬ名である、之に就いても、種々お話をしたいが、まあそれは後のととして、此の禪宗とは、何を主旨として居るかと言へば、禪宗には、何も趣旨とする處がない、唯一口に云ふと、釋迦牟尼佛の御心の其まゝを傳へて往く宗旨である、斯様云へば、ナニ釋迦牟尼佛の御心を其儘に傳へて往く宗旨は、禪宗ばかりに限つたわけはない、何宗でもさうである、佛様の心も傳へない宗旨があるものと云ふ非難も出ませうが、他の御宗旨は、いつれも、佛の御經を力として、其のお經に依つて宗旨を立て居るのである、即ち「淨土三部經」であるとか、「法華經」であるとか、または「大日經」であるとか云ふ御經を力として、其の御經に總つて立て居るのである、甚だしきは、論部と云つて、佛様の亡なられた後に、出て來られた素い僧侶方の書かれた議論を所依として立て居る宗旨もある、即ち是等は、釋迦牟尼佛の御正意を受取つたとは申すものゝ、いつれも其の末に走つて居る傾きがある、然るに禪宗と申せば、御經を力とするでもなく、論部を力とするでもなく、唯だ佛様の有難い思召、佛様の貴い智慧、其のお心のそのまゝを悉皆御傳へ申した教であつて、一名佛心宗とも申します、佛の心の宗旨と云ふのである、佛のお語を傳へる宗旨の類ではない、全くの御心のそのまゝを傳へると云ふのである、尤も、佛心宗と云ひ、禪宗と云ふのは、一時の名、假に云ふだけであるが、兎も角佛様の

御思召を其儘に傳へると云ふ宗旨であるから、釋迦牟尼佛が、佛法をお説き遊ばされた時に、迦葉尊者と云ふ一番のお弟子に我が禪宗の教を傳へられた御様子は何様であるかと云へば、多數の弟子等の前で、金波羅華と云ふ花を一枝見せられたばかりである、然るに、居並ぶ弟子等は何の意とも解らず、茫然として居たが、迦葉尊者ばかりは、其御心を會得して、破顔微笑と、カラ／＼と笑はれた、其花を見せられた佛様の御心と、即坐に笑はれた迦葉尊者の御心との間には儘に佛法の眞實の面目が傳はつて了つたので、此の傳授が了んだ上からは、もはや、御經も要らぬ、御説法も入らぬ、世間のとに譬へて見れば、活花や茶の湯の師匠が其弟子へ、大事を譲る時には、種々な巻物や器も用ふるけれども、いざ眞實の奥伎を傳へると云ふ時には、もうそんなものは要らない、極意の處が、師匠の心から、弟子の意へ傳はつたら、何も巻物や器を用ふるには及びますまい、即ち、眞實の奥の手を傳授するには、心と心とて傳へもし、又傳へられるのである、今、釋迦牟尼佛が、眞實の弟子を得やうとしての御説法は四十餘年の永い間で、其の間には、澤山のお經を説かれたけれども、イザ佛法の奥の手の傳授となれば、其様な物は要らなくなる、即ち佛様と、迦葉尊者との心と心の照し合ふ處で佛法傳授が了んだのである、然るに其迦葉尊者が、やはり斯くして阿難尊者と云ふ弟子に傳へ、代々傳はつて達磨大師に至り、達磨大師は第廿八代目のあ方であつたが、その達磨大師が支那へ渡られて、慧可大師と云ふお弟子にも傳へになつたとい、最初にも申して置きました、それから追々と傳はつて、遂に曹溪の六祖大師や黃檗希玄禪師、臨濟慧照大師と云ふお方を経て、其後にまた曹山本寂大師や、洞山悟

本大師等の御方が御出世になり、追々其の教が廣まつて来て、各々其の弟子等が佛の教を廣めて参りた、乃で、其と同じ様に、他の祖師方もまた種々の宗旨を立て、各々宗義を張つて居られたから、其中で唯だ佛の心を傳へる眞實の佛法ぢやと云ふて居ても、何となく規格がないやうに思はれて、餘の宗旨との區別が立たなくなつた處から、餘宗の方も、我教の心を佛心宗と云ふ名を付て了つた、然るに、其佛心宗と云はれる宗旨は、重に修行をするのに坐禪をする、坐禪とは、坐つて工夫をするものであるが、前々からも申す通り、佛様の御正意を會得するには、却々普通の修行では往かぬ、眞實此の身の妄想を打捨て、生死岸頭に大自由を得る覺悟がなくてはならぬから、其の精神を鍛鍊して佛様の御正意如何と了るやうに、坐禪をするのである、他の宗にも禪定と云つて坐禪をする宗派もあるが、我が宗は他の宗旨のやうに、一方に偏したと云はず、蕭直に佛様の御正意に合致せんとするのであるから、佛様が菩提樹下に坐禪せられた如き様子で坐禪をなし、其の坐禪を以て佛法の眞意を探る道ぢやとしてあるから、自然坐禪を重んずるのである、其處の處から、追々我が佛心宗の心を禪宗と云うたもので、何も禪宗と云ふ宗旨が別にある譯ではないのである、佛様の御正意を其の儘に傳へて參る教の心を、假に名けて佛心宗、又は禪宗と云うたのであると思へば、大層な誤はない、其故に、我宗に於ては、自ら禪宗など云ふ名を用ひず、我宗は佛法の總府なりと云ふて居る、佛法の總府とは、佛教の總本家とも云ふべきものである、即ち宗派と云うて別に立つたものではない、唯だ佛法の本家だと云ふとてある、然るに其の禪宗と云ふ中へ、またも弟子方の説き様が種々になつて参り

各々弟子方を薫陶せられた處から、臨濟大師の下には臨濟宗と云ふ宗旨が出来、黃檗禪師の下には黃檗宗が出来、曹山、洞山の二禪師の下から曹洞宗と云ふものが出来た、即ち、禪宗の禪宗たる所に於ては、別段變りはない、佛様の御心を其儘に傳へると云ふに至つては違ひはないのであるが、まわ、追々と時が立つに従つて、斯様な別れも出来て来て、また此外にも禪宗の中に、法眼宗、雲門宗など云ふ宗旨もあるが、之は日本に傳はらないから、今は別段に申しませぬ、兎も角も斯様に禪宗が數派に分れて来て、禪宗と云ふ中にも今日日本にある分だけが、三派もあるとが解れば可いのである。

五

さて、其の禪宗の中で、只今我々の奉じて居る宗旨は何派かと云へば、曹洞宗である、前に申した曹山洞山の兩大師の下から出た宗旨で、世間から、自然に曹洞宗と云ふ名を受けた宗旨である、然し前に申した支那の曹洞宗と、日本の我々の奉じて居る曹洞宗の宗旨とは或は全く同じでないかも知れぬ、まづ、其名の如きも、支那では、曹山洞山の二大師の下から出たから曹洞宗と云ふたのであるが、日本では、後醍醐天皇からの御給旨に、曹溪の六祖大師（前にも出ました）と、洞山大師との下から出たのであるから、曹洞宗と云ふのであると云ふ様な工合で、一寸、其處に違ふ處があります、それは兎も角として、我が日本に禪宗が傳はつた事は、随分古いとであるが、臨濟宗の榮西禪師と云ふ方が、建久二年に支那から禪宗を傳へて來られたのが、實に本邦に禪宗の公に入つた初りである、その後、何様も禪宗があまり振はなかつたが、其後

道元禪師と云ふ方があつて、最初は天台宗の學問をなされたが、まだまだ其教へ方が手緩いと思はれたから、更に臨濟宗の禪師方に尋ねられたが、まだ腑に落ちぬ處があつたので、遂に志を決して、支那——其頃は宋朝であつたが——へ往かれ、彼の國の天童山の如淨禪師と云ふ方に就いて追々修行せられた處、實に如淨禪師は、天下に比少なき禪宗の高僧であつて、今まで日本中に我が師匠と頼むべき人はないと思はれた道元禪師も、此の如淨禪師のみに深く其徳に敬慕せられて、殆んど我身を忘れて事へられたものであるから、如淨禪師も、深く其の志を慕し、且つ、道元禪師は、佛法の大事を傳ふべき大人物である云ふことを知られたので、即ち、釋迦牟尼佛から、代々傳はつた處の眞實佛法の奥義を全く御示しになり、遂に佛法を傳へるに就ての、あらゆる法具、佛具等までも残らず御傳へになつた、乃で道元禪師は、残らず、之をを受けになり、禪宗の教を悉皆受け取つて日本に歸つて來られたのが、安貞元年で、後堀河天皇の御代であつた、それから、其の教を日本國に布き廣められ、遂に越前の國に永平寺と云ふ寺を建てになり、其後四代の弟子に盤山紹瑾禪師と云ふ方があつて、ますく道元禪師の禪風を盛にせられ、能登の國に總持寺と云ふ寺を開かれて、其の徳が四方に聞えたものであるから、遂に後醍醐天皇から總持寺を曹洞宗の本山とせよとの諭旨が下りました、之が即ち日本に曹洞宗の起つた理由である、即ち曹洞宗の宗旨を支那から傳へて來られたのは道元禪師で、其の道元禪師の四代目の御弟子の方が、總持寺を開き、始めて天下に公に曹洞宗と云ふ名乗りを擧げられたので、此の兩禪師の力に依つて、我々は、此の貴い曹洞宗、殊に自ら「今日如

淨は則ち佛法の總府なり」と云はれた程の大徳ある如淨禪師から、佛祖正傳の佛法を我が日本に受け續いで、お互に難有い佛法を手取るとの出來るに至つたのは、偏に我が道元禪師と、盤山禪師との御恩に依るとである、されば、我が曹洞宗に於ては、道元禪師のこそ高祖大師と稱し、盤山禪師のこそ太祖國師と稱し、且つ永平寺、總持寺の兩山を兩大本山と稱へて居る次第である。

六

以上説明した處で、粗ば佛教の大要から、禪宗のと、曹洞宗のとまで、粗ば盡した積りであるが、さて、此の禪宗の中の曹洞宗の中に、身を置いて、釋迦牟尼佛の御心を其儘に受け續ぎ、高祖道元禪師のお思召のまゝに行なうて往かうとする吾々の修行は何様すれば可いのであるか、何が我々の本分であるか、且つは此の禪宗とは何を教へるものであるか、禪宗は佛法の總府なりと云つて、佛様の御正意が我宗に傳はつて居るとは解つたが、其の禪宗を奉ずる者の心掛けや、修行のことも充分に心得て居なければならぬ、唯だ道理ばかり解つても、實際に行ふとが解つて居らぬでは、到底宗教たるもの、實際の効果をみるとが出來ないものであるから、之より、佛教を奉ずる者の心得を御話申したいのであるが、前にも云ふ通り、實に佛法は難解しいものである、宗旨に依つては、佛教を何でもないものゝやうに云ふて居る人もあるが、實は、さう容易いものではないのである、「禪宗の修行は骨が折れる」と世間で善く申して居りますが、實に禪宗は樂をしながら修行する事が出來ないのである、臨濟大師が嘗て黃檗禪師に「如何なるか是れ佛法の大意」と問はれ

た時に、何の御返事も無く、ボカリと棒で打られ、其後又久しい間修行をして、又同じとを問うて、又打られ、三たび問うて又打られ、其の最後一棒の下に成程佛法は遠いものではなかつた哩と、始めて悟を開かれたとは、禪宗のとを學んだ人の能く知つて居るとである、其他歴代の祖師方の中には、八十を起えてから佛道修行に出られた方もあり、三十年間蒲團を離れず坐禪をして居て、遂に悟りを開いたと云ふ方もある、それ故、我が曹洞宗の教へに於ても、決して安々と其の奥義を傳ふるとをせず、代々の祖師方は、いつも坐禪を勤められ、吾人も互でも、坐禪をせねば、兎ても禪宗の奥義に達するとは出来ぬとなつて居る、處が、御承知の通り、坐禪と云ふものは、決して樂なものではない、出家の身となつて、坐禪三昧に日を送して往く御方でも、猶ほ、この修行は安からぬものである、况してや之を世間在俗のお方々に修行させて往かうとするのは、随分無理な注文である、又、實際出来ないとである、乃で、我宗では、在家のお方を化導する爲に一段の道を開いてある、即ち、出家の身分は、自ら智識を研き、坐禪もすれば、あらゆる修行を致して、佛法の大事を明らめ、佛様の御恩召と同様の心に達するのであるが、さて、其の修行が終んで、佛と同じ心に立至つてから、振願つて、今迄の事を思うて見れば、別段變つたとはないのである、富士山へ登るのは餘程骨が折れる、苦しいとである、一合目から五合六合、七合八合、九合と登り詰めて往く時には、中々一通りのとではない、さて登つて了つて、絶頂から見下して見れば、何の變つたともない富士山の頂きに上れば何ぞ別なものが見えるかと思へば、何も別なものはない、今登つて来た道筋がズーツと見えるばかり

で、ハヤ一向に別の面目もなく、別段の見るべきものもない、龍宮が見えるでもなければ、月世界が見えるでもない、道元禪師が「若し睡眼を廻らして行地を願れば、一翳の眼に當る無し、將に見んとすれば、白雲萬里」と謂はれたのは、實に此の處である、宋の東坡居士と云ふ人が、佛法は何ぞ不思議のとかあるか知らんと、云ふので、段々勉強して見てから大に悟る所があつて、「廬山烟雨漸江湖。不到千般恨未消。到得歸來無別事。廬山烟雨漸江湖」と云はれたも、此の外はないのである、即ち自分が苦勞をして富士山の絶頂へ登るとの出来る人は、進んで富士山へ登るも可いが、兎てもそんなとをして居る暇がないとか、又は肺が續かないとか云ふ人は、自分で往かぬ代りに、誰か知り合ひの人に、山の上の景況を聞いて、ナルホド、富士山へ登れば何ぞ珍らしいともあらうと思つたが、左様であつたか、別段不思議なともないのであつたかと合點をすれば、今度餘所で何ぞ富士山との話が出て、實は富士山へ登つた人の話には斯様くであるとのと、關八州も能く見えるさうで、函根の蘆の湖も手に取る如くに見えるさうでと、まわ自分で見たと同様に話が出来、今、禪宗の教を知りたいと云ふ人も亦是と同じとで、自分は兎ても坐禪をして悟りを開く力はない、丁度富士山へ自分で登る程の元氣がないのと同じである、併し、禪宗の教へは聞きたい、信仰して見たい、それには何様すれば可いかと云へば、外に道はないから、まづ、坐禪をして悟を開かれた御出家方や、又は佛様や祖師方の書き遺された書籍を力にして、佛法の様子を聽いたり、讀んだりする、丁度、富士へ登山をした人に山の上の様子を詳しく聞くやうなものである、さて、充分聞いて了つて見れば、

自分は坐禪をせんでも、苦行をせんでも、佛法の様子は解る、解つた處で其の解つた通り、身に行つて往きさへすれば、ヤハリ佛様の御思召に協ふやうになる、丁度富士山の上の話を深く聞き覚えて了へば、富士山の上の様子は、自然と胸の中に明かになつて居るのと同じである、即ち、出家の方が佛法を學ぶには、まづ智慧を研いて、苦勞を厭はずに進んで往くのである、「大疑は大悟を發す」で、疑ひから入つて往く、然るに在家の方は、其だけの力も餘裕もないから、まづ、佛祖方の御遺訓を信じ、信仰を第一にして、佛様の教は決して疑はず、祖師方の教は信じて疑はぬと、明かに定まりが付けば、直に佛法の信者とされる、「佛海は信を以て能入となす」と『華嚴經』に謂はれた通り、信仰と云ふ基が据つて、さて佛法を拜聴し、禪宗の教を授かつて見ると、何のとはない、誠に樂々と佛法を戴くことが出来、又、禪宗の教を頼りに安心立命すると出来る、さて、其の禪宗殊に曹洞宗の安心立命の道筋は何んなものであるか、曹洞宗信者の心掛けは、如何すれば完全に往くかと云ふに就ては、「曹洞教會修證義」と云ふ有難い御文があつて、詳しく曹洞宗の安心を説いてあるから、其を御覽になれば、何も彼も明かになるのであるが、今は、それを詳しく話しする譯に行かぬに依つて其「修證義」を拜見する前に心得置くべきとを少しく述べて置かうと思ふ、

七

『修證義』を御覽になれば、直に解るとであるが、まづ我々曹洞宗信者の心得べきとは、我宗は、宗派に偏つたものではない、曹洞宗の安心と云ふのは、ツマリ、佛法全體の安心である、曹洞宗で教へる道は、凡て

佛法總體の教へであると云ふことを、充分、心得て置かねばならぬのである、さて、左様心得られた上で、『修證義』を御覽になると、第一章の「總序」には「生を明らめ死を明らむ」とと、佛法の遇ひ難きこと、我々が人間と生れて來るとの甚だ難いこと、世の無常なること、それから、善惡の業報が免れ難いことが説かれてある、さて、斯る世の中に於て我々が兎角惡いとを爲ては、苦果を招き、實に何時までと云ふ限りなく罪苦の渦の中に苦しんで居るのは、甚だ情ないものであるに依つて、之を免れるには、まづ自ら罪を悔いて、「あゝ今までは悪かつた」と一念發起する時には、直に其の罪が消えて了ふ、其處が第二章の「懺悔滅罪」と云ふ處である、最早罪が消えて了つたならば、佛の戒法を受け、佛様へ御廻り申して、清浄な心を持ち、諸佛の位に入る處が第三章の受戒入位である、既に戒を受けて、最早我身は汚れた身体ではない、戒法を受けた身であるよと慥に決定すれば、最早我身は佛の位に上つたも同じと、其の受戒入位の身となるからは、自分一人の法樂に安心せず、直に菩提心を起して、衆生濟度に身を委ね、心を任せ、我身を捨て、世の中の人々を濟度すると云ふ心を發す、其心の發りました時には、之が直に佛様と違はぬ心掛けで、其心掛け通りに行ひさへすれば、佛様と吾々と少しも違ふ所はない、(第四章發願利生)さて我々がさう云ふ貴い身になつたのは誰のお蔭であるかと云へば、悉く是れ佛様の御恩である、して見れば、吾々は佛様の御恩には報せねばならぬのであるが、何様して佛様の御恩を報ずると云へば、別の事は無い、佛様の御思召通りに我々が心と行ひとを正しくして往くより外はないのである、日々行ひの上にも、其日々の喜し向き

の上にも、唯だ佛様の御思召に協ひたいと云ふ心掛けを失はず、勤めて行く時には、假令佛法が如何ぢやの、禪宗が如何ぢやのと、工夫分別は要らないでも、唯だ佛法を信じ、曹洞宗の安心を戴くと云ふ心がわたり、行が之に伴つて往くばかりで、モウ此の外には佛教信者の勤めもなく、曹洞宗信者の安心はない(第五章行持報恩)、斯くの如く、まづ此世の無常のと三世因果の恐るべきとを考へて、めし悪かつたと懺悔をなし、佛の戒法を受けて佛弟子となつたからには、自己一人善人になるばかりでない、世間の人を殘らず助けてやらうと心掛け、乃で佛様の御恩を報ずる爲に、日々稼業を勵むと云ふが曹洞宗の在家の方の安心の捷徑で、歴代の祖師方は出家門から困難して大法を悟られたが吾人凡夫は唯だ之を信じ、之を行へば、理窟は解らんでも、佛様の御思召に合ふやうになる、此の外に成佛の道は無く、此の外に佛教信者たる本懐はない、曹洞宗信者の安心も此より外に所詮はない、誠に此の貴き大法を御説き下された釋迦牟尼佛、之を御弘め下された歴代の祖師、別けても、我が日本に此大法を傳へられた高祖太師、太祖國師御二方の御恩の程を思ひ參らせて、常に尊敬奉侍せらるゝは勿論のと、一刻も御思召の程を念頭に失はず、日々行ひの上に佛教信者たる表現が見えますやう勵まされたいものである。

八

全神禪宗のときか、曹洞宗のときか云へば、甚だ活潑に、困難いと列べ立て、青年諸君の希望に合ふやうにするが普通であるが、今回のお話は、唯だ

欠

MISSING

(一) 佛法の事 (二) 禪宗の事 (三) 曹洞宗の事 (四) 曹洞宗在家安心の事

と此の四ヶ條だけのお話をするに止めたいと思ひましたから、兎ても届かぬ天上の月を、指頭で指し示す如く高尙の佛教の上から見たら、誠に卑近極まつたお話ではあるが、僅に是だけのことをお話申しました。猶ほ御縁があらば、又お話致すともありませう、且又、私のお話の上で、更に禪門のことを知りたいお方や、又「修證義」のことを委しく聞きたいお方には、又御望みに應じてお話するであらう。

「佛の一字も心田の穢れ」ごまで云はれた佛法に對して、斯く老の練習にも似たることを申したのは誠に我ながら耻かしらうである。終に臨みまして、我が道元禪師の御歌を詠じて、我が卑しい俗塵を清めませう。

あらいその浪もえ寄せぬ高岩にかきもつくべき法ならばこそ
いひすてしその言の葉の外なれば筆にも跡をとらざりけり
水鳥のゆくもかへるも跡たえつされども道は忘れざりけり

每月一回 十五日發	佛	教	一冊金拾錢 六冊五拾五錢 十二冊壹圓
每月一回 一日發行	傳	道	一冊金貳錢 六冊十貳錢 十二冊廿四錢
通俗	佛教各宗綱要		全一冊 正價壹圓廿錢 郵稅金拾四錢
各宗高僧傳			正價金拾壹圓 郵稅金拾錢

草溪社發賣

明治三十四年七月六日印刷
明治三十四年七月九日發行

編輯人

草溪社編輯局
東京市淺草區新谷町十番地

發行人

來馬琢道
右同所

印刷人

山本鉄次郎
東京市京橋區四番屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 英舍
東京市京橋區四番屋町廿六七番地



草溪社章

發行所

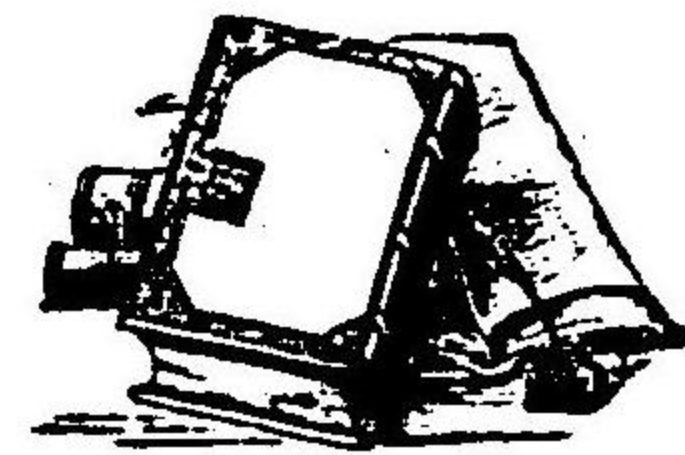
東京市淺草區
新谷町拾番地

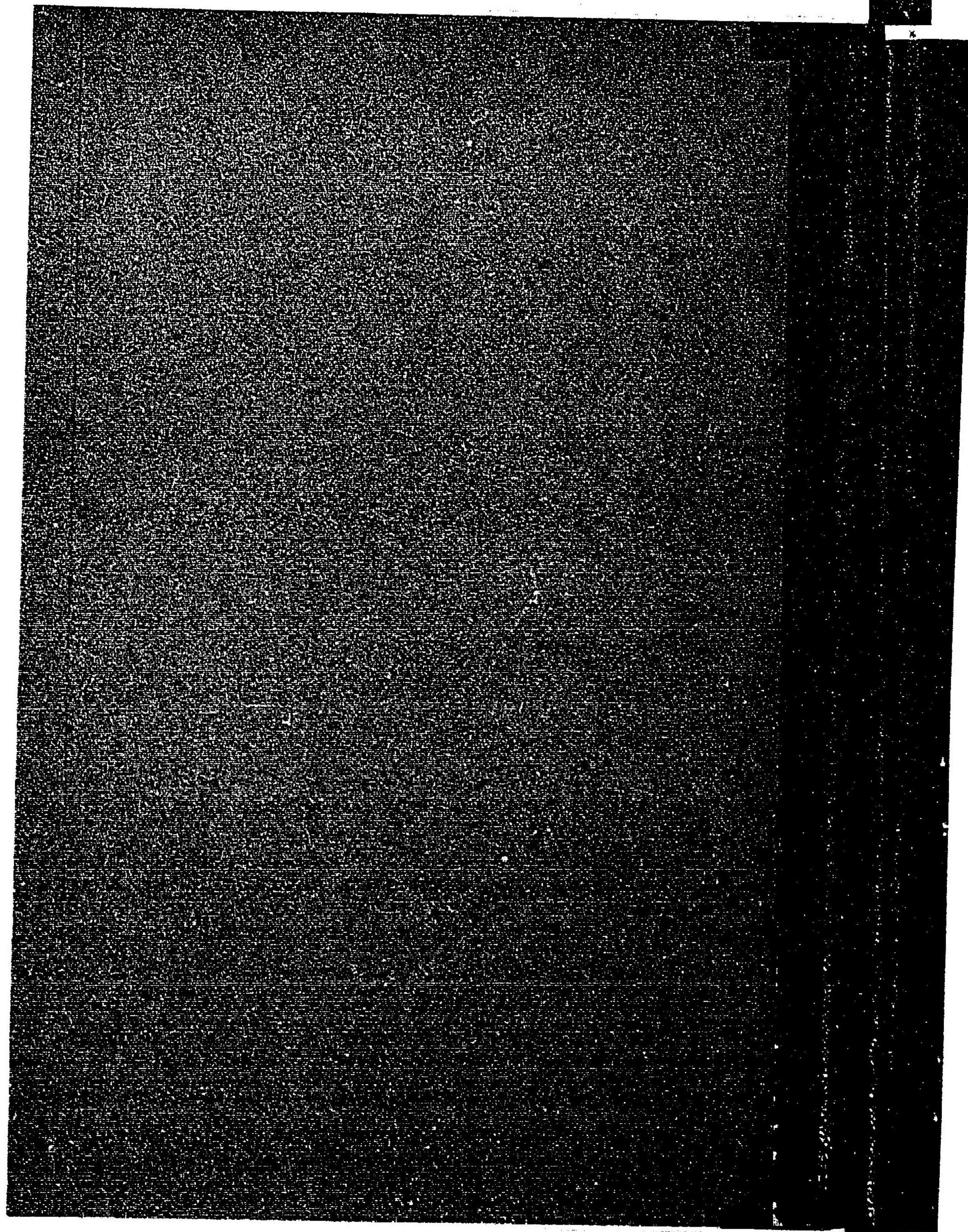
草

溪

社

L-65





3
3

曹洞宗要講話

草溪社編輯局

国立国会図書館

019689-000-8

特48-553

曹洞宗要講話

草溪社編輯局／編

M34.7

ABG-0483



特

